

少し戻りつつある京都の修学旅行事情



日本の古い歴史が学べ、修学旅行先の定番となっている京都で修学旅行が回復しつつある。今春は3年ぶりに新型コロナウイルス禍による行動制限がなく、実績がコロナ前の水準に近づいた事業者も目立つ。訪日外国人のインバウンド需要が落ち込むなかで、各地の修学旅行の誘致競争は激しく、京都や奈良の自治体は宿泊費補助などに力を入れている。清水寺(京都市)に向かう参道では、制服を着た修学旅行生で混雑し、買い物を楽しんだり赤い仁王門の前で記念撮影をしたりする修学旅行生が目立つようになってきた。清水の参道で土産物店を営む男性店主は「5月の連休が明けてから修学旅行生が増え、コロナ前の8割くらいまで戻ってきた。外国人観光客はまだまだ少ない

のでとてもありがたい」と話していた。しかし、修学旅行が回復しつつあるとはいえ、コロナ前と同じ状況になったわけではない。JTBの担当者によると「外国人観光客などが戻っておらず、これまで修学旅行を受け入れていなかった宿泊施設が受け入れを始めている。そのため、旅館ごとにみるとコロナ前より減っているところもある」。市内中心部にある修学旅行中心の旅館の社長は「三密回避で部屋あたりに収容する人数を減らしていることもあり、宿泊者数はコロナ前のまだ4割程度」と感じており、まだまだ回復にはほど遠い。



＜解説＞京都市産業観光局によると、同市を訪れた修学旅行生はコロナの影響を受ける前の2019年は約70万人だったが、20年は約16万人、21年は約20万人まで激減した。しかし、緊急事態宣言などの制限がなくなり各地から生徒が京都を訪れている。JTBの担当者は「感染拡大する前の19年度とほぼ同水準の予約が入り、5月下旬にかけてピークを迎える」と語る。個人タクシーの運転手は「修学旅行生向けの予約が多い。運転手不足もあり、大手のタクシー会社が引き受けきれない予約が個人営業のタクシーに回ってくるほど」という。また、ある京都市内の旅館の従業員は「5～6月は修学旅行の予約でほぼ満室になっている」と話す。京都市の宿泊施設数は20年3月末のピーク時には約4,000か所だったが、コロナ禍の中で22年3月末には約1割減少した。それでも18年3月末の水準よりは上回っている。このような中で、京都の観光協会、自治体は修学旅行の誘致に知恵を絞る。京都府も補助金を充実させる。20年10月か



ら「三密」を避けるために貸し切りバスの台数や宿泊施設の部屋数を増やすための費用として生徒ら1人あたり1000円の補助金を支給。22年度からは京都市外の観光地や教育施設を訪れるなどの条件を満たせば、1人1000円を追加で補助する。担当者によると「申請はかなり多い」という。コロナ禍で業績のどん底を見た修学旅行業界。なくなった需要は戻ってはこないだろうが、今後の回復に向けて、あの手この手で知恵を絞らないといけな時代に入った。今までのように黙っていれば来てくれる時代ではなくなった。